チャンパ祠堂の壁龕の種類と配置について

STUDY ON TYPES OF NICHE AND ITS DISPOSITION IN KĀLAN OF CHAMPA REMAIN

重枝 豊*

Yutaka SHIGEEDA

This study investigates, through field surveys, the types and disposition of Niches in *Kālan* of Champa Remains. The Kingdom of Champa existed between 2th and 15th century and professed the Hindu and Buddhist faith. And as its religious building *Kālans* were built of bricks. Consequently these two point mentioned below are clarified; 1. Principal type of niches are arranged at the three walls except entrance wall and on which other type of Niches are added, 2. All niches were made during the construction and located only important parts of chief *kālan*.

Keywords: Champa, bricks, niche, *Kālan*, Vietnam

チャンパ、レンガ、壁龕、祠堂、ベトナム社会主義共和国

1. はじめに

チャンパは2世紀から15世紀にかけて現ベトナム社会主義共和国の中部に栄えた王国である。チャンパ王国^{*1}ではヒンドゥー教及び大乘仏教を国教として信奉した。現存する宗教建築は、焼成レンガを主要材料とした組積造である。その構築においては、あらかじめ「柱型」^{*2}、「柱間壁」^{*3}などの凹凸部を壁面に設けて積み上げていることに特徴がある。この柱形と柱間壁を多用して装飾する壁面構成は、チャンパ建築に共通する手法である。

チャンパの宗教建築の中心は「*Kālan*」^{*4}と呼ばれる祠堂で、外壁面の柱型は花葉文様等の装飾で飾られ、柱型に挟まれた柱間壁にはヒンドゥー教彫像等のモチーフが刻まれることが多い^{*5}。装飾性の高い外壁面に対して、内部壁面には凹所が設けられているだけで、彫刻類は施されない。この内部の凹所を本稿では壁龕^{*6}と呼ぶ。壁龕はチャンパ建築の付属施設^{*7}には設けられず主要建築物である祠堂にのみ用いられている。内部壁面にほとんど装飾が施されないことは、チャンパ建築の特徴の一つであるが、壁龕自体も同様に装飾がされることが少ない。

また、この壁龕は造営後に壁面を削って設けられるのではなく、造営時からそれぞれの壁龕が計画され、施工されていることが注目される。組積造の壁面に壁龕を設けることは施工手順の煩雑さだけでなく、構造的に脆弱な部分を生み出すことになる。つまり、構造上重要な壁面に空間を設ける技術は、チャンパ建築の施工技術を解明するための重要な意味を持っている。さらに、ヒンドゥー教、仏教の主神を祀る中心建物である祠堂にのみ壁龕が計画されていることは、平面計画と内部での儀式などが極めて緊密な関係を持っていたことが伺われる。

これまで美術様式史を中心におこなわれたフランス極東学院のチャンパ研究では、主に外壁面の装飾が注目され、彫像や彫刻されたレリーフが様式判別の指標として重要視されてきた^{*8}。そのため、装飾性の乏しい壁龕の配置と構造に関してはこれまで言及されていない。

本稿では、チャンパ建築では唯一壁龕の設けられた建物である祠堂を考察の対象とした。研究対象とした祠堂は、伽藍を構成する主要な建築であることから、創建年

* 日本大学理工学部建築学科 助手・工修

Dept. of Architecture, College of Science & Technology, Nihon Univ., M. Eng.

代が碑刻文等の第一次資料の研究等から明らかにされていることが多い。これまでの編年^{*9}による造営年代を前提とし、調査によって得た55棟の祠堂の実測図を技術史的な観点から分析した。平面計画と壁龕の配置計画の関係を比較し、祠堂平面の変遷過程を解明することが本研究の目的である^{*10}。

2. 壁龕の種類について

壁龕の検討に入る前に、壁龕と関係するチャンパ建築の祠堂の基本構成について整理しておきたい。

- 1) 祠堂内部には、礼拝の対象物としてリングや神像などが安置されていた。そこでおこなわれる儀式は、リングなどを聖水で清めるもので、聖職者が中央に安置されたリングのなど信仰対象の周囲を巡回するものであった。それら儀式の関連建築装置として壁龕が設けられた^{*11}。
- 2) 祠堂の出入口は1カ所で、原則として入口は東面するが、一部には入口が西面する場合もある。それ以外に南面する特殊例も存在する。
- 3) 祠堂平面は主房と前房から構成される。主房に付属した小規模な前房を持つ付属型、独立した構造で前房を構成する延長型、拡張型がある。(図-1)

図-1 形状による前房の基本構成 (概念図)

- 4) 建築材料として用いられたレンガは、焼成されたもので、それぞれのレンガの大きさは一定していない。
- 5) レンガを積んだ外壁面には、未彫刻のまま据え置かれた部分が多くみられる。未彫刻部分は建物の背面など目立たない部分に多いこと、彫刻作業を途中で中止した箇所も多くみられる。このことから、レンガ面に施された彫刻や彫像は、建物をいったん積み上げた後に彫刻して、完成されたことがわかる。

以上のようなチャンパ建築の特徴を踏まえた上で、祠堂内に設けられた壁龕の種類について分類して考察を加えたい。壁龕は壁面の一部に、単独で設けられる規模の小さなものや、大小複数の壁龕が組み合わされたものがある。それらの中で、壁面の一部に設けられた小規模のものを「小壁龕」、床面から直接立ち上がる規模の大きい壁龕を「大壁龕」^{*12}、さらに大小2種類の壁龕を組

み合わせたものを「複壁龕」と呼ぶ。

事例数の多いのは小壁龕を単独で用いる場合で、「小壁龕型」と呼ぶ。大壁龕を用いる場合には、次の3つのタイプがある。一つ目は大壁龕に小壁龕が併用される場合で、大壁龕内に一つの小壁龕が用いられる「1複壁龕タイプ」、二つ目は大壁龕の中に2つの小壁龕を用いた「2複壁龕タイプ」、三つ目は大壁龕だけを設置する場合でこれを「大壁龕単独タイプ」と呼ぶ^{*13}。また、祠堂でありながら壁龕の設けない「無壁龕型」もみられる。

図-2 ミソンA1～A7復元平面図・立面図
参考文献(7)のスケッチを元に大橋智子が実測により補正した。 S=1:350

図-2 ミソンA1～A7復元平面図・立面図

以上、チャンパ祠堂の壁龕の有無と壁龕の形式を整理すると、小壁龕型、大壁龕型(1複壁龕タイプ、2複壁龕タイプ、大壁龕単独タイプ)、無壁龕型の3種に分類

される。

壁龕を構成する建築材料は、ミソン遺跡主祠堂B1にある砂岩製の壁龕の事例を除くと、すべてが焼成されたレンガ壁面に設けられている。

図-3 複壁龕の構成(左:ホライ北壁龕, 右:社壁龕)

3. 壁龕の構造と装飾について

次に、壁龕の構造と装飾を中心に検討したい。チャンパ建築の組積造の上層部は迫り出し構造^{*14}を用いて構成されており、壁龕も同様に迫り出し構造が用いられている。組積造においてこの工法を用いる場合、構造的制約から壁龕の規模はレンガ部材の大きさによって制限を受ける。そのため、大きな壁龕を設置するためには、一つ一つのレンガの迫り出し幅を小さくする必要があり、その結果壁龕は高くなり、壁龕を構成する空間そのものが大きくなる。これらの場合にレンガを迫り出す方法を分類して検討すれば、レンガの構築技術上での変化が考察できる。

そこで、迫り出し構造の種類をその形状を中心に2つに分けることにする。一つ目を「連続通減型壁龕」と呼び、二つ目を「段層通減型壁龕」と呼ぶ。前者は、レンガを一枚ずつ迫り出して頂部を支え、ピラミッド型の空間を形成するもので、後者は、2～4段のレンガごとに迫り出して壁龕を構成するものである。

さらに、壁龕装飾の有無によっても分類することができる。前述したようにチャンパ建築の祠堂内部は極めて装飾性に乏しい。しかし、一部に簡単な刳形文様のついた事例がある。これを「装飾型壁龕」とし、装飾の施されていないものと区分する。以下、壁龕の構造および装飾について、それぞれ事例をあげて考察する。

a) 「連続通減型壁龕」

ミソンB4(9世紀末、ドンジュオン様式)の北面に残る壁龕を代表的な事例として検討する。この祠堂は東面しており、南、北、西各面に壁龕がある。3つの壁龕のうち北面の壁龕には修復の跡がなく創建時の状態が良

く残っている。この壁龕ではレンガを9段分内側に転ばせながらほぼ垂直に立ちあげ、そこから6段のレンガを迫り出して壁龕を構成している。迫り出し全幅^{*15}は556mm、迫り出し全高^{*16}は464mmである。壁龕の起点(壁龕床面)と迫り出し起点までは51mmほど内転んでいる。各層の通減をみると基本的にはレンガのそれぞれの通減を正確に決めて施工されたとは考えられない。小規模な施工であるために、現場で調整しながら大まかに通減の比率を設定しているとみられる。迫り出し全幅に対する迫り出し全高の比率は1:2程度で、極めて緩やかである。

図-4 ミソンB4北面壁龕実測図

b) 「段層通減型壁龕」

最も事例の多い壁龕の形式で、現存遺構の大部分はこの形式に属している。段層通減型壁龕の多くはレンガ2～4段ごとに迫り出してゆくが、1つの段層部を構成するレンガ数は同じ壁龕でも一定ではない。また、壁龕の上部にゆくに従って1層を構成するレンガ数を減らしてゆく構成が一般的である。その事例をポー・ナガル主祠堂を事例にあげて検討したい。

ポー・ナガル主祠堂(10世紀中葉、ミソンA1様式)内部には5カ所の壁龕が設置されているが、その中で保存状態のよい4つの壁龕について検討したい。壁龕の高さは668mm～756mm、幅は609～800mm、奥行は238～284mmと様々である。各段層も基底面から4段、3段、2段、2段、1段とレンガを通減させているが、壁龕B、壁龕Eではそのルールが崩れている。造営時に壁龕の規模が正確に決められたのではなく、この場合にも連続通減型と同様に施工時に現場調整の要素が高い。各段層部の迫り出し幅も42mm～87mmと大きな開きがある。開口部の上層にゆくにしたがって迫り出し幅は小さくなるが、それも一律ではない。以上のことから壁龕の規模は一定のす

法基準が用いられたのではなく、レンガ枚数（13～14段）を造営時に設定し施工したとみられる。

図-5 ポー・ナガル主祠堂壁龕実測図

図-6 各種の壁龕の実測事例

c) 「装飾型壁龕」

クオンミー北副祠堂（10世紀初頭～中葉、ミソンA1様式）において唯一みられる壁龕で、壁龕の外郭部に簡素な線型が設けられている。クオンミー主祠堂（10世紀中葉、ミソンA1様式）、同南副祠堂（10世紀初頭、ミソンA1様式）においては段層減型壁龕が用いられて

おり、同様の装飾はみられない。この遺跡は外壁の装飾モチーフにジャワとクメールの様式との融合がみられることをPh. Sternが指摘している^{*17}。このような装飾型壁龕の存在は特異で隣国のクメール建築にも類例はみられない^{*18}。

4. 各壁龕の配置と特徴

a) 「小壁龕型」

小壁龕型は祠堂壁面に数カ所の小壁龕を設けたもので、最も事例が多く、配置が多様である。小壁龕は通常床面から1m程度の位置に設けられる。小壁龕は東面している祠堂では、主房の南、北、西の3面のほぼ中央に設けられる。この配置形式が小壁龕の配置事例として最も類例が多い。この配置を「東面・3壁龕タイプ」と呼ぶ。現存事例は、ポー・ハイ主祠堂、ミソンB4・E5・C6の各副祠堂、ポー・ナガル南東・同南、同北西各副祠堂、チェンダン主祠堂・同南副祠堂、金塔、ポー・クロン・ガライ、ポー・ロメの各主祠堂などである。それぞれの祠堂の造営時期は8世紀末から17世紀まで広く分布している。

同様に西面している祠堂に東、南、北面に壁龕を配置する形式を「西面・3壁龕タイプ」と呼ぶ。この事例には、ミソンA1主祠堂、ミソンE6副祠堂がある。さらに、南面した特殊例として（南面・3壁龕タイプ）、ポー・ダム主祠堂、同南西副祠堂、同南東副祠堂がある。これら3つのタイプでは入口側の壁面には壁龕を設けないことから、大きく3壁龕タイプとして分類する。

これに対して、3壁龕タイプの壁龕配置に加えて主房内部側の片側又は両側に小壁龕を加える事例がみられる。西面した祠堂の西面南側に1カ所壁龕を設けたミソンA10副祠堂、ミソンG1主祠堂、東面した祠堂の東側壁面の両側に各1カ所の壁龕を設けたポー・ナガル主祠堂などである。さらに、チャンパ建築の祠堂の中で唯一東西両方向に入口を持つミソンA1では主房の南北壁面各1カ所に加えて、主房東西壁面にそれぞれ2カ所の壁龕を配している。それに加えて、唯一前房の両面に壁龕を設けたミソンE4副祠堂がある。これらは出入口面などに壁龕を付加していることから「入口面壁龕付加タイプ」と呼ぶ。

以上の他に、東面・3壁龕タイプの変形として、北壁面の中央にソーマストラ^{*19}を設けるために、中央に壁龕を配置できずに壁龕を両サイドに振り分けて設置したと見られるミソンC7副祠堂（「分割設置タイプ」）、西面して西面を除く3壁面に大小3カ所の壁龕を配置し、西面した壁面にも2カ所計11カ所壁龕のあるミソンF1主祠堂、東面する内部各壁面に各2カ所の壁龕があるミソンB1主祠堂（両者を「多壁龕タイプ」）、また、東

面3壁龕型で西面南隅に床に接して壁龕を加えて設けたクオンミー北副祠堂(「変形付加タイプ」)など小壁龕型の中でも壁龕の多彩な配置がみられる。

b) 「大壁龕型」

b-1 「1 複壁龕タイプ」

大壁龕の中に小壁龕を1つ配置した事例である。1複壁タイプに属するのはホアライ北副祠堂とドンジュオン主祠堂の2棟だけである。ホアライ北副祠堂は東面しており南、北、西各面に1複壁龕がある。ドンジュオン主祠堂も東面し、南面、北面だけに1複壁龕があった。ドンジュオン主祠堂では東面の南北にそれぞれ1つの小壁龕が別に設けられているが、本来設けられるべき西側には壁龕がない。

まず、ホアライ北副祠堂(9世紀前半、ホアライ様式)について検討する。大壁龕の奥行きは540mm~640mm、幅は1470mm~1580mm、高さ3.75mの規模で、入口である東面を除く3面に大壁龕が設置されている。ホアライ遺跡から出土した遺物は少なく、これまでに確認されていないが、この壁龕内には砂岩または木造の彫像が安置されていた可能性が考えられる^{*20}。大壁龕の平面図(図-7)をみると、壁龕のある3方には外部に壁体が突き出して配置されている。大壁龕の形状と外部の突き出し部の構造には密接な相関がみられる。つまり、レンガ造の内部の3方にそれぞれ大きな控壁状の構造とすることにより、内部空間を拡張しようとした意図が読み取れる。これは構造上の制約から平面が大きくなると、それにとまって拡大する屋蓋を支えることができないため、内部を拡張するために大壁龕が設置されたと考えられる。

ドンジュオン主祠堂(9世紀末、ドンジュオン様式)には2カ所に大壁龕が設けられているが、H. Parmentieの資料^{*21}から、内部に設置された祭壇の形状との関係がみられる。ここでは唯一内部の祭壇の3方に階段が設置されており、内部で儀式を執り行うためには大壁龕を設けないと側面の通路の幅は800mm程度で通行に制約がおきる。南面、北面の大壁龕に加えて、東面の入口に振り分けて小壁龕が配置されており、小壁龕型でみた入口面壁龕付加タイプと類似した構成を示している。西面に大壁龕がないのは、西側壁面に彫像が設置されていたためである。他のヒンドゥー教を主神とする祠堂には2方向だけに壁龕を設けた事例はなく、大乘仏教を祀る寺院として建立されたの宗教上の意図が反映されたとみられる。さらに、ドンジュオン仏院内の他の4基の副祠堂および7基の小祠堂には、壁龕が設けられていない。

b-2 「2 複壁龕タイプ」

大壁龕内に小壁龕を2つ配置する事例で、ホアライ主祠堂(9世紀初頭、ホアライ様式)だけに見らる形式であったが近年倒壊した。H. Parmentierの資料^{*23}には、

明らかに現存している北副祠堂で用いたのと同じ表現を用いて、大壁龕の中に2つの小壁龕が描かれている。基本構造は1複壁龕と同じ構成だが、大壁龕の奥行きは1複壁龕の事例よりも狭い。大壁龕の規模は、奥行き450mm~500mm、幅1400mm~1520mm、高さ4.4~4.6mである。入口である東面を除く3面に大壁龕が、さらにその大壁龕の両脇に小壁龕が配置されていた。

b-3 「大壁龕単独タイプ」

大壁龕型には「大壁龕単独タイプ」、「1複壁龕タイプ」「2複壁龕タイプ」があることは前述した。さらに、この大壁龕型は規模の大きな「A」と、大壁龕の形だけが形骸化した小規模な「B」に大別できる。「1複壁龕タイプ」「2複壁龕タイプ」はすべてAに属し、Bは「大壁龕単独タイプ」にだけにみられる。大壁龕単独タイプAには東面した祠堂の3壁面に大壁龕のあるホアライ南副主祠堂(8世紀末、ホアライ様式)、西面して3つの大壁龕のあるミソンA'4副祠堂(9世紀末、ドンジュオン様式)などの事例がある。大壁龕単独タイプBにはミソンC1主祠堂(10世紀中葉、ミソンA1様式)、ポー・ハイ北副祠堂(8世紀末~9世紀前半、ポー・ハイ様式)などの事例がある。例えば大壁龕単独タイプAのホアライ南副祠堂の壁龕は、奥行き1170~1460mm、幅1220~1350mmと大規模であるのに対して、大壁龕単独タイプBのミソンC1の場合は、奥行きが91mm、幅900mmと特に奥行きに規模の違いがみられる。大壁龕型A(大壁龕型のうち規模の大きなもの)は、チャンパ王国南部の9世紀前半までのホアライ3遺構と、9世紀末から10世紀末の北部の3遺構にみられる。それに対して大壁龕型B(大壁龕型のうち壁龕規模の小さなもの)は、南部のポー・ハイ副祠堂を除けば、ミソンC1、チェンダン北副祠堂、象牙塔(12世紀末、ビンディン様式)など王国北部・中部にみられ、6例中4例がビンディン様式(11世紀初頭~13世紀初頭)に属している。また、ミソンA'4を除いたすべてが東面している。

c) 「無壁龕型」

付属建築に壁龕を設けた事例はないが、祠堂であるにもかかわらず壁龕のないものがある。その事例には、ミソンE1、H1主祠堂、銀塔・ビンラム・クォンミー・雁塔・銅塔・バンアンの各主祠堂、ミソンF3・A'2・B3・C5の各副祠堂、フンタン主祠堂・同副祠堂等の17例である。これら無壁龕型の祠堂には、主祠堂で壁龕のないもの、副祠堂で壁龕のないものがあり、規模、また建設時期によって壁龕の有無の差は判別できない。あえて述べればビンディン地区に造営された祠堂の多くが、都城中心部の丘上や城内に構築された祠堂で、外壁面にも装飾が少なく遠望が強く意識されている。これらは都市型の宗教施設と考えられており、王城(チャキエ

表-1 各祠堂の造営時期と壁龕の形式

遺跡名称	造営時期	美術様式	壁龕の配置形式
a) 小壁龕型の祠堂			
ポー・ハイ主祠堂	8世紀末～9世紀前半	ポー・ハイ	東面・3壁龕タイプ
ミソンA' 1主祠堂	9世紀前半	ホアライ	西面・3壁龕タイプ
ポー・ダム主祠堂	9世紀前半	ホアライ	南面・3壁龕タイプ
ポー・ダム南副祠堂	9世紀前半	ホアライ	東面・3壁龕タイプ
ポー・ダム南西副祠堂	9世紀前半	ホアライ	南面・3壁龕タイプ
ポー・ダム南東副祠堂	9世紀前半	ホアライ	南面・3壁龕タイプ
ミソンF 1主祠堂	9世紀前半	ホアライ	西面・多壁龕タイプ
ミソンC 7副祠堂	9世紀末	ドンジュオン	東面・分割設置タイプ
ミソンB 4副祠堂	9世紀末	ドンジュオン	東面・3壁龕タイプ
ミソンE 5副祠堂	10世紀初頭	ドンジュオン	東面・3壁龕タイプ
ミソンA 10副祠堂	10世紀前半	ドンジュオン	西面・入口面壁龕付加タイプ
ミソンA 1主祠堂	10世紀前半	ミソンA 1	東面・入口面壁龕付加タイプ
クオンミー北副祠堂	10世紀初頭～中葉	ミソンA 1	東面・変形付加タイプ
ポー・ナガル主祠堂	10世紀中葉	ミソンA 1	東面・入口面壁龕付加タイプ
ミソンE 6副祠堂	10世紀末	ミソンA 1	西面・3壁龕タイプ
ポー・ナガル北西副祠堂	10世紀末	ビンディン	東面・3壁龕タイプ
ミソンE 4副祠堂	11世紀	ビンディン	西面・入口面壁龕付加タイプ
ミソンB 1主祠堂	11世紀	ビンディン	東面・多壁龕タイプ
ミソンC 6副祠堂	11世紀	ビンディン	東面・3壁龕タイプ
チェンダン主祠堂	11世紀	ビンディン	東面・3壁龕タイプ
チェンダン南副祠堂	11世紀	ビンディン	東面・3壁龕タイプ
ミソンG 1主祠堂	11世紀初頭～12世紀前半	ビンディン	西面・入口面壁龕付加タイプ
ポー・ナガル南東副祠堂	12～13世紀	ビンディン	東面・3壁龕タイプ
ポー・ナガル南副祠堂	12～13世紀	ビンディン	東面・3壁龕タイプ
金塔主祠堂	13世紀	ビンディン	東面・3壁龕タイプ
ポー・クロン・ガライ主祠堂	14世紀初頭	後期様式	東面・3壁龕タイプ
ポー・ロメ主祠堂	17世紀	後期様式	東面・3壁龕タイプ

b) 大壁龕型の祠堂			
b-1) 1複壁龕タイプ			
ホアライ北副祠堂	9世紀前半	ホアライ	東面・1複壁龕タイプA
ドンジュオン主祠堂	9世紀末	ドンジュオン	東面・1複壁龕タイプA
b-2) 2複壁龕タイプ			
ホアライ主祠堂	9世紀初頭	ホアライ	東面・2複壁龕タイプA
b-3) 大壁龕単独タイプ			
ホアライ南副祠堂	8世紀末	ホアライ	東面・大壁龕単独タイプA
ポー・ハイ北副祠堂	8世紀末～9世紀前半	ポー・ハイ	東面・大壁龕単独タイプB
ミソンA' 4副祠堂	9世紀末	ドンジュオン	西面・大壁龕単独タイプA
クオンミー南副祠堂	10世紀初頭	ミソンA 1	東面・大壁龕単独タイプA
ミソンC 1主祠堂	10世紀中葉	ミソンA 1	東面・大壁龕単独タイプB
チェンダン北副祠堂	11～12世紀初頭	ビンディン	東面・大壁龕単独タイプB
象牙塔主祠堂	12世紀末	ビンディン	東面・大壁龕単独タイプB
象牙塔南副祠堂	12世紀末	ビンディン	東面・大壁龕単独タイプB
象牙塔北副祠堂	12世紀末	ビンディン	東面・大壁龕単独タイプB

c) 無壁龕型の祠堂			
ミソンE 1主祠堂	8世紀	古代様式	西面
ミソンF 3副祠堂	9世紀前半	ホアライ	東面
ミソンA' 2副祠堂	9世紀前半	ホアライ	東面
ドンジュオン小祠堂	9世紀末	ドンジュオン	北面
クオンミー主祠堂	10世紀中葉	ミソンA 1	東面
ミソンB 3副祠堂	10世紀中葉～10世紀末	ミソンA 1	西面
ミソンB 7小祠堂	10世紀中葉～10世紀末	ミソンA 1	東面
ミソンC 5副祠堂	10世紀中葉～11世紀初頭	ミソンA 1	東面
銀塔主祠堂	11世紀初頭	ビンディン	東面
ビンラム主祠堂	11世紀	ビンディン	東面
雁塔主祠堂	11世紀	ビンディン	東面
ミソンH 1主祠堂	12世紀前半	ビンディン	東面
バンアン主祠堂	12世紀	ビンディン	東面
フンタン主祠堂	12世紀末	ビンディン	東面
フンタン副祠堂	12世紀末	ビンディン	東面
銅塔主祠堂	13世紀初頭	ビンディン	東面
トゥーティエン主祠堂	13世紀末	ビンディン	東面

【Ph. Sternの美術編年による 参考文献(8)】 ①古代様式 8世紀以前 ②ポー・ハイ様式 8世紀末～9世紀 ③ホアライ様式 9世紀前半
 ④ドンジュオン様式 9世紀後半～10世紀初頭 ⑤ミソンA 1様式 10世紀初頭～11世紀初頭 ⑥ビンディン様式 11世紀初頭～13世紀初頭
 ⑦後期様式 13世紀以降

ウ)から離れた聖地に設けられたミソン遺跡群のように限られた王族等によって儀式が執り行われた閉鎖的な宗教存在から、都市と一体化した宗教施設への変化を示唆している。このような観点から考えれば、壁龕を設けないことは各時代の祠堂内での儀式形式の推移や、各遺構の造営意図などと関係があったと考えられる。

5. まとめ

これまでに述べてきた壁龕の種類と配置についての相関を整理しておきたい。チャンパ建築の祠堂の壁龕を、壁龕の数、方位、種類によって分類すると図-7、表-1のようになる。チャンパ建築の祠堂は、ほぼ矩形の主房とその前に付属して設けられた前房によって構成されているが、前房に壁龕を用いたのは、ミソンE 4だけである^{*22}。それ以外の祠堂では、主房の壁面の4面のうち、3面もしくは4面に設けられており、壁龕は主房を中心に配置されていた。さらに、壁龕を設けない無壁龕型の祠堂もみられる。

次に、配置について整理すると、南、西、北の3面のほぼ中央に小壁龕を各1カ所設ける3壁龕タイプが18例と最も多く、この形式は小壁龕を用いる祠堂の基本形とみなすことができる。これを基本としてその他9例は3壁龕タイプに壁龕を付加したと見なすことができる。

大壁龕型の事例は12例であり、10世紀中葉以降のミソンA 1様式からビンディン様式では、形骸化して規模が小さくなる。

無壁龕型は17例あり、年代にばらつきがある。各時代、各地域に壁龕のある祠堂が存在することから、壁龕の機能が失われて無壁龕型が生まれるのではなく、意図的に壁龕が設けられなかったと考えられる。この問題については主要な宗教施設が都市施設と組み合わせられて造営されるようになる10世紀以降(ミソンA 1様式期からビンディン様式期)の変化で、この時期に無壁龕型が17例中13例を占めている。

以上これまでに判明した祠堂の壁龕の特徴について、以下に整理しておく。

- 1) チャンパ建築の祠堂において壁龕は原則として主房内壁面に設けられた。壁龕を前房内壁面に設けた事例はミソンE 4だけである。
- 2) 壁龕で用いられているレンガの仕上げ面と、施工状態から判断すると、壁龕は建設当初に計画されて施工されている。
- 3) 壁龕の配置は、南、西、北の3面のほぼ中央に小壁龕を各1カ所設ける3壁龕タイプが小壁龕を用いる祠堂の基本形である。この3壁龕タイプを基本として、いくつかの壁龕を付加したタイプがある。
- 4) 大壁龕型の事例は11世紀までは北部と南部に共通してみられるが、11世紀以降のビンディン様式期には

- は奥行が小さくなり形骸化している。大壁龕型の祠堂はミソンA 4を除けば、すべてが東面している。
- 5) 11世紀以降に造営されたビンディン地区^{*23}の祠堂の多くが壁龕を持っていない。ビンディン地区の遺構の多くは、丘上に配置され遠望を重視した造形で、内部での儀式性が希薄になった傾向を示している。
 - 6) 壁龕の構造には、連続遞減型と段階遞減型の2種類があるが、後者が多用される。

歴史的建造物の内部空間の変遷については、その用途、宗教体系の質的变化に伴う儀式の変容、建築構造技術の進展などと密接に関係する。壁龕の配置には、各方向を示す方位神と密接な関係を持っていたとする指摘もある^{*24}。今後、用途の特定などの研究の進展が必要とされる。

本稿は実地調査によって資料の得られた壁龕の配置を中心に整理したが、今後は壁龕の施工技術等の詳細について考察を加えたい。

参考文献

- (1) G. セデス 山本智教訳『東南アジア文化史』1989. 大蔵出版
- (2) 石井米雄他、『東南アジア世界の形成』1985. 講談社
- (3) 大林太良編『東南アジアの民族と歴史』1984. 山川出版社
- (4) 千原大五郎『東南アジアのヒンドゥー教建築』昭和57年 鹿島出版会
- (5) ベトナム社会科学院編 石澤良昭他訳『チャム彫刻』1988. 連合出版
- (6) 桃木至郎他『チャンパ王国の遺跡と文化』(財)トヨタ財団 1994.
- (7) H. Parmentier, 『Inventaire descriptif Des Monuments cāms de L'Annam』4vols. 1909-1918. E. F. E. O.
- (8) Ph. Stern 『L'Art du Champa et son Évolution』Toulouse 1942.
- (9) J. Boisselier 『La Statuaire du Champa』Paris 1963. E. F. E. O.
- (10) G. Maspero 『Le Royaume de Champa』Paris et Bruxelles 1928.
- (11) R. C. Majumdar, 『CHAMPĀ History & Culture of an Indian colonial Kingdom in the far East 2nd-16th century A.D.』Gian Publishing House Reprinted. 1985.
- (12) Tran Ky Phuong, 『Cham Ruins』The GIOI Hanoi 1993.

注 記

- 1) チャンパは2世紀末からインドと中国を結ぶ中継交易国家として栄えた王国で、ヒンドゥー教・仏教の神々を祀る宗教建築を200棟以上も建立した。チャンパ王国は15世紀末まで東南アジアの中継貿易の拠点として栄えたが、11世紀頃から越族の南下によって南部のヴィジャヤ地域へ王国の中心が移動し、15世紀には王国は実質上滅びた。参考文献(2)p. 56～p. 104. (3)p. 174～p. 178, p. 212～p. 223. これに対して桃木至郎は、「18世紀までチャンパ王国の2つのグループの内、海洋系のグループは各地で積極的に商業活動を行っていた」と指摘している。「新しいチャンパ史」参考文献(6)p. 65～p. 72. 18世紀まで実質的なチャンパ人の活動は認められるが、15世紀に王国が本格的な宗教建築を造営できなくなったとみなし、15世紀末を衰亡期とする。本稿ではこのチャンパ王国時代に造営された組織

- 造宗教建築を総称して「チャンパ建築」または「チャンパ祠堂」と表現する。
- 2) フランス極東学院はフランスのアジア地域研究機関。フランス領インドシナ時代にサイゴンから1900年にハノイに移されて設立。インドシナ、中国、日本、インドを対象とし考古発掘、碑文調査、遺跡の保存修復、言語、民族調査などの研究を行っている。同学院 (E. F. E. O.) の研究者達は装飾された柱形部分を、pilastreと呼んでいる。(英) Pilaster Ph. Stern 参考文献(8) P. 23 組積造であるチャンパ建築では、柱として構造を支持するのではなく壁全体で上部構造を支えている。
 - 3) フランス人研究者はentre pilastre(英: inter pilaster)と呼んでいる。柱形と柱形の間の凹形の壁面を指す。
 - 4) 20世紀初頭からインドシナ地域を精力的に調査したフランス極東学院の研究者は、中国史料『梁書』(諸蕃志宋史通考卷上)『隋書』に記載された「干蘭」をチャム語のKālanに比定している。これらの邦訳として本稿では千原大五郎の建築分類に従って「祠堂」という呼称を用いる。参考文献(4)P. 41 現在ベトナム人は祠堂(トードゥオン)と呼んでいることから祠堂の語を用いる。さらに、1つの伽藍の中で祠堂が1棟の場合と、大小数棟設けられる場合がある。並立した祠堂の中央にあるものを「主祠堂」、その他の祠堂を「副祠堂」と呼ぶ。
 - 5) この部分はカンボジアやインドネシアのレンガ建築では盲扉とすることが多い。チャンパ建築でも盲扉を設けたポー・ハイ主祠堂があるが用例は少なく、祈る女性の姿の彫像が設置される。
 - 6) 通常、壁龕(niche)は「①壁を凹状に抉った部分でしばしばアーチや半ドームで覆われる」(建築大辞典, 1993, 1225p)とされる。壁を抉って空間を造るという「形態上の意味」から、本稿では壁龕という言葉を広義の意味にとらえたい。さらに、壁龕の構造についても迫り出し構造を用いた特殊事例として、壁龕の概念に含めて用いる。「そこに彫像や花瓶が置かれる」(同前掲書)との機能上からの視点からも壁龕という言葉は妥当であろう。現在この部分を示すチャム語の呼称は残されていない。また、外壁面にも壁龕空間を設けている。その両者を区分する場合にのみ外壁面のものを「外壁龕」内壁面のものを「内壁龕」と呼ぶ。
 - 7) チャンパの付属建築には、楼門、聖水庫、宝物庫、矩形房、碑文庫などがあるが、チャンパ時代の呼称や用途についてはわかっていない。拙稿「ミーソン遺構の呼称と建築構成に関する一考察」日本建築学会大会学術梗概集 1991。
 - 8) チャンパの宗教建築ではほとんどの建築物に外壁龕が設けられている。外壁龕の装飾の変化については、H. Parmentier, Ph. Sternが言及しているが、内壁龕はほとんど検討されていない。
 - 9) チャンパ建築の美術史分類については、参考文献(8)p. 13~110。本稿では各建物の建築年代はPh. Sternの考証によった。
 - 10) チャンパの宗教建築物は、後世の増改築や補修が多く施されている。そのため本来壁龕のなかった壁面に、後世に内部壁面が大幅に改造され、壁龕が設けられた場合もあるとみられるが、本稿では改造の明らかなものを除いて考察する。
 - 11) チャム族の祭礼をカテ祭りと呼ぶ。この祭りについてはTran Ky Phuong「The Kalê new year's Festival of Cham Kthic in N-inh Thuận」に儀式内容が記されており、本稿はそれに従った。
 - 12) 人が踏み入れることが可能な、大きな凹所である大壁龕(walk-in niche)を壁龕の範疇に入れることは、一般に誤解を招く心配がある。しかし、現在では機能も用途も特定できないことから、仮に大壁龕という呼称を用いる。本来は内部空間を拡張するために用いられた構造的手法で、外部壁面の形状と相関性をもって設けられたと考えられる。
 - 13) 大壁龕の中に小壁龕(small niche)を設置するものを、その小壁龕の数によって1複壁龕と2複壁龕と命名した。大壁龕は構造的に屋蓋の構造と強く関係しており、小壁龕は壁の構造の一部であることからこれらを分離して検討することにした。
 - 14) 迫り出し積みをhanging overと呼び、この構造をcorbel constructionとして統一して用いる。千原大五郎, 参考文献(4)p. 53~p. 58 アーチの技術の認められているビルマなどの一部地域を除けば、カンボジア、ヴェトナム、ラオスの14世紀以前の組積造の宗教建築は、この迫り出し構造で屋蓋が支持される。
 - 15) 迫り出し全幅とは、迫り出し部分を全体としてとらえた場合に、それぞれのレンガの迫り出した幅の合計をいう。
 - 16) 迫り出し全高は迫り出しの起点から迫り出しの終点までの高さ。
 - 17) 参考文献(8)p. 30~p. 39。クオンミーの柱型や壁面にみられる渦巻唐草の連続文様の浮き彫りは中部ジャワのチャンディ・カラサン(9世紀中葉)と、菱形の連続花様文はカンボジアのプリア・コー(879年)と極めて類似していると指摘している。
 - 18) アンコール遺跡群の中にあるブラサット・クラヴァン遺跡の内部にはヴィシュヌ神やラクシュミー像などが内部壁面に彫刻されている。しかし、クメール遺跡でも開口部の砂岩彫刻などを除くと内部には装飾は少なく、特に祠堂の主房壁面に彫刻を施した事例は現在のところほかに見つかっていない
 - 19) ソーマストラとは、リングや聖水などを外部に流す砂岩製の樋、またはその樋の出入口に対する総称
 - 20) ポー・ナガル主祠堂には木彫の象が壁龕の前方に配置されている。方位神に対する信仰からも大壁龕内に信仰の対象物が設置されていた可能性が高い。
 - 21) 参考文献(8) vol III Pl. XL I. ~XL VII. にスケッチがある。
 - 22) 参考文献(8) vol III Pl. XV. ~XX.
 - 23) 参考文献(8) vol IV Pl. LXXXIX~XC I. ミソンE 4は米軍の直撃弾を受け残っていない。前房に壁龕があったことは、平面、断面図にそれぞれ描かれていることから明らかである。
 - 24) ビンディン地区はサンスクリット語でヴィジャヤと呼ばれた地域で、11世紀以降に北部越族の圧迫を受け王国の中心が移る。
 - 25) Tran Ky Phuong 参考文献(12) p. 23~24 チャンパ建築では方位神として東には雷神インドラ、南西には火の神アグニ、南にはヤマ、北西にはヴォリク、北東にはイシャーナ、南西にはブラフマー、北にはクヴェーラの各神が祀られたとされている。

(1995年11月10日原稿受理, 1996年5月9日採用決定)